

氏名	クリコフ マキシム
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第197号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉琴古流尺八の伝承構造の研究——芸系のフィールドワークを通して——

論文等審査委員

(総合主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
(副査)	〃	〃	( 〃 )	植村 幸生
( 〃 )	〃	〃	( 〃 )	西岡 龍彦
( 〃 )	聖心女子大学	〃		岡崎 淑子
( 〃 )	東京芸術大学	非常勤講師		野川 美穂子

(論文内容の要旨)

本研究の主な目的は、琴古流尺八における一つの芸系の伝承実態を明らかにし、伝承の存続を支える重要な要素を解明することである。

そのために伝承を、構造を持っている総体として考え、それを構成する諸要素を分析する方法を取り入れた。伝承構造は、伝承の対象となった音楽それ自体と、それが継承されているコンテキスト、即ち、共同体の音楽実践からなっている。伝承を構成する諸要素を大きく五つのグループに分けた。「誰が誰に」「何を」「何のために」「どのように」「どこで」伝えるか、ということである。

本研究は主として民族音楽学的アプローチを用い、琴古流尺八の伝承に関する様々な資料から得た情報と、フィールドワークから得た情報を収集した。また、分析に際して、いくつかの概念（例えば、「イントネーション」「サウンドアイデンティティ」）を導入した。

第一章では、琴古流を概観し、尺八楽におけるその位置づけについて論じた。そして琴古流尺八の伝承を分析するために、諸要素リストを作成した。

第二章では、特定のジャンルの伝承を分析した研究を紹介し、本研究のための主な先行研究を概観した。尺八に限らず、邦楽におけるあるジャンルの伝承実態を調べた論文、特に、民族音楽学的アプローチを扱った研究は少ないことを述べた。

第三章では、一芸系の伝承が行なわれる場、「教授の場」を対象とし、その場に関連する諸要素を記述した。その中では、学習過程の特徴、師弟の役割と必要な能力、楽器の構造、楽譜、演奏論、音楽的要素（音色・音程・リズム）などを取り扱った。その際、諸要素の相互関係、学習過程における自由と限定に対して特に注意を払った。稽古における言語的・非言語的コミュニケーションの使用についても論じた。また、同芸系の前世代と比較し、各要素の中で変化があるかどうかを明らかにした。

第四章では、伝承が行なわれるもう一つの間、「演奏の間」を対象とした、共同体の主な発表会、その準備過程・合奏練習・本番を記述した。その際、本番における関係者の役割、合奏練習（下合せ）の特徴について論じた。「演奏の間」でも、前世代と比べれば、どの要素が変化したかを調べた。

第五章では、一芸系における伝承の実態とその存続の可能性に対して総合的考察を行った。

まず、伝承の連続と断絶の問題の一例として、山口五郎による琴古流本曲の中興について論じ、「琴古流」という伝承の連続性が継承者にどの要素を通じて感じられるのかを指摘した。

次に、本研究の対象となった芸系の伝承におけるすべての不変・変化をまとめた。

変化した要素は、稽古の長さ、練習方法に関する考え方、言語的コミュニケーションの使用、ダイナミックス、本曲における技法などである。

変化していない要素は、楽譜、楽器の構造、一曲の学習、伝承過程における自由と限定などである。

そして、伝承の存続を維持させる中心的要素と伝承のマトリックスを構成する要素を解明した。中心的要素は、①楽譜、②楽器の構造、③「イントネーション」「サウンドアイデンティティ」、④非言語的コミュニケーションの使用である。

伝承のマトリックスは二つの要素からなり、即ち、①「何かを伝承するという習慣」、②「グループとして伝承する習慣」である。

次に、以上のマトリックスによる共同体造りは普通、いわゆる「家元制度」と関連していることを指摘し、総合的モデルとして「家元制度」の根本的要素分析を行い、それに関する主な批判をまとめた。しかし、具体的な共同体を研究する際に、概念としての「家元制度」はあまりにも抽象的であるので、筆者はその代わりに「家元制度」的共同体造りという概念を提案した。そして、そのような共同体造りは、邦楽界における伝承の存続のためにいかに重要であるかを考察した。

結びでは、論文全体の結果をまとめてから、今後の課題を述べた。

研究の結果、同芸系の前世代と比べて、当共同体においては伝承の最も重要な要素は変わっていないこと、芸系のサウンドアイデンティティとそれを継承する共同体の効果的存続のために、必要な要素がすべて揃っていて働いていることを述べた。

また、教授の場における言語的コミュニケーションの使用が増えても、非言語的コミュニケーションの方が今も優先され、「教える」より「伝える」という思想が働き、「師弟は同時に同じ音楽を吹く」という要素が教授法の基盤として残っている。それによって伝承における身体性は次の世代へ伝わっていくのである。

最後に、邦楽界においては、研究者側だけでなく多くの共同体の関係者も、属する伝承の特徴、そのサウンドアイデンティティを、要素分析を通じて明らかにすれば、その保存・発展の活動をより意識的効果的に行なうことができるだろう、と提唱した。

#### (総合審査結果の要旨)

本論文は、琴古流尺八の一芸系を対象に、その伝承実態を詳細に解明し、伝承の存続を支える条件を考察したものである。この研究を貫く理論として、コージブスキーの一般意味論、アサフィエフのイントネーション論を基盤とした「要素分析」の理論を提唱し、自身が所属する社中の「教授の場」と「演奏の場」での数年にわたる綿密なフィールドワークから得た情報を、音楽自体とそのコンテクストの双方に関わる要素に分解し、前代と比較分析することを通して、当該芸系の特質を具体的に明らかにした。

本論文の中心部分は、フィールドワークに基づく知見を詳細に分析記述した第3章（教授の場）と第4章（演奏の場）、およびそれらを踏まえて総合的考察を加えた第5章にある。主な成果は、(1)伝承の存続を支える中心は楽譜、楽器の構造、「イントネーション」と琴古流の「サウンドアイデンティティ」、非言語的コミュニケーションの使用にあり、それらは「教える」より「伝える」ことを重視し「共同体として伝承する習慣」が生み出していると指摘したこと、(2)こうした伝承実態の維持に「家元制度的共同体造り」が不可欠であることを結論づけたこと、である。

フィールドワークから得た知見を、「要素分析」の理論を用いて綿密に分析し民族誌を記述するという本論文の研究手法は、民族音楽学的アプローチを生かしつつ独自性が十分認められる。また、現代の日本音楽伝承の現場に分け入り、それを従来にない密度で、しかも表現力豊かな日本語で生き生きと描き出し、読み応えのある論文に仕上げた点も高く評価できる。「家元制度的共同体造り」に関しては、共同体の中で核となる部分や構成員個々の存在意義の濃淡、聴衆との関係等が伝承存続に与える影響につい

て一層踏み込んだ考察がほしく、現代と前代の伝承を比較する際にも、当該の当事者間に特有の条件についてより十分な検証が必要であろう。これらの課題が残されてはいるものの、一芸系の事例研究として大きな成果を収めたこと、伝承構造の要素分析という本論文の研究手法が日本音楽研究はじめ今後の研究展開にも有効性をもつことは疑いなく、学位を授与するにふさわしい優れた論文であると認められる。あわせて、本論文の出発点でもあり、申請者が年来の課題としてきたロシア民族音楽の伝承再生に、日本音楽を対象とした本研究の成果、とりわけ共同体造りの手法が活かされることを祈念する。